

若者が居場所に巡りあうために

法学部政治学科4年S組
塩原良和研究会 11期
学籍番号 31756512
佐藤みゆき

目次

1. はじめに

1-1. 問題意識と研究目的

1-2. 先行研究、本論文の位置づけ、分析の枠組み

1-3. 研究方法・調査方法

2. 居場所の定義

2-1. 居場所とは

(1) 物理面

(2) 心理面

(3) 自己完結する場、他者との関係性の場

(4) 居場所の分類

2-2. 若年世代の現状

3. 居場所がないことの問題と居場所の役割

3-1. 居場所がないと何が問題か—居場所がある人となない人—

3-2. 居場所の役割

3-3. 居場所づくりのための取り組みにはどのようなものがあるか

4. インタビュー調査

4-1. インタビューの目的と形式

4-2. インタビュー結果

4-3. インタビューからの分析・考察

4-4. 慶應義塾大学生にとっての居場所

4-5. 居場所の再定義

5. 終わりに

6. 参考文献

1. はじめに

1-1. 問題意識と研究目的

みなさんは「居場所」と聞いて何を想像するだろうか。自分の家が思い浮かんだという人もいるだろうし、学校が浮かんだ人もいるだろう。はたまたコンビニや図書館など公共の施設が出てきた人や、〇〇ちゃん、〇〇くんという時、など人との関わりの上でのものが思い浮かんだ人もいるかもしれない。居場所とは人それぞれ違うのが当たり前で様々な空間がある。私自身にも周りの人に恵まれたことで、安心できる居場所というものが存在する。

しかし、居場所がないと感じている人もいる。そのことを、川崎南部の工場地帯の一角、

京町にある学習支援教室で出会った中学生との交流をきっかけに感じるようになった。私は研究会の活動として、社会福祉法人青丘社によって運営されている教室で、経済的に困難を抱えた中学生を対象に学校の勉強のサポートをしている。生活保護を受けて育ってきた彼・彼女らは、経済的に厳しいから塾に通うことができない、学校に通えない時期があって勉強がわからなくなった、家庭状況も複雑な子が多いというような状況である。彼・彼女らの中には、学習支援教室には来ているが学校には行けていない、学校では素が出せない、など本来中学生の生活のほぼすべてと言っても過言ではない中学校で、自分の居場所がないと感じている子がいる。そして大学進学も金銭面を考慮して諦めるべきなのだろうか悩んでいる子もいる。彼・彼女らは決して経済的に豊かとはいえない、むしろ貧困といえる環境の中で、家庭も複雑な状況で育ってきたからこそ、普通に暮らして大きな不自由なく中学校に通っているような人たちとは異なる、学校に居場所がないという立場になっているのではないか。

このように、彼・彼女らと接する中で対話を通して初めて知る悩みを聞くことで、今まで考えたことがなかった「居場所」について考えさせられたことがきっかけとなり、若者にとっての居場所の存在について問題意識を持つようになった。教室に来る中学生たちが学校に居場所がないと感じると通いたくなくなるように、居場所がないと感じている場所では楽しめないし、行くこともしなくなるだろう。すると結果、彼・彼女らは勉強をする意欲も低下してしまうという負の循環に陥るのではないか。これを考えると、居場所がないと感じている人が心のよりどころとなる場を作ることや、現在居場所とは感じていない場をこれから少しでも居場所という、安心できる場に近づけることには多感な若者にとって少なからず、彼・彼女らが今後成長していく上での糧となるのではないか。そのため、現在の若者にとっての居場所は実際どのような意味を持っているのか、また、その居場所がない人にとって、これから居場所を作っていくための筋道を探ることを本研究の目的としたい。

その際、若者という研究対象を慶應義塾大学に通う2020年に就職活動を行った4年生の男女に限定して考察したいと思う。義務教育も終わり、自由に自分の居場所を選ぶことのできる時期が大学生である。しかし一方で居場所づくりを怠ると、居場所がない状態にもなりかねない(阿部(真) 2011)。実際、友人や教員とのコミュニケーションが適切に取れずに、大学生活への適応に困難を抱えている大学生が増加している(浅葱・奥野 2018)。全国の大学、短期大学及び高等専門学校を対象とした学生相談についての調査では、約8割の学校で友人、知人、異性関係を含む対人関係に関する相談が増加していることが明らかにされている。(日本学生支援機構 2015)。また、2020年は新型コロナウイルスが流行し始めて就職活動にも多大な影響が出た年である。これによって何か居場所に変化は起きたのか、いつもと違う環境の中どのようにして就職活動を乗り切ったのか。このような、大人とも子供とも言える、さらに予期しないことが発生する中、不安定な時期を抱えている大学生を対象とすることで、安定していない時期でも居場所が作れるということが伝わるのではないか。そして、慶應義塾大学の学生という、受験という競争に勝ち抜いてきた結果、日本全国的に

見て高学歴を持つことになり、一見、世間一般からすると私立ということで家庭環境も不自由なく育ってきていそうな、相対的になんの不自由もなさそうに思われている学生を対象にする。彼・彼女らはどこかに居場所があったからこそ勉強なども頑張ってきたのではないか。高学歴の人を対象にすることで、結果の出せる良い居場所の成立過程、居場所の条件が導き出されるのではないか。これが分析されることで、学習面に何かしら問題を抱え、貧困に置かれている立場の人たちにも、高学歴にも関わらず居場所がないと感じられたり困難を抱えている若者にとっても、これから成長していくにあたって居場所づくりのヒントが得られるのではないか。そう考え、慶應義塾大学の学生を研究対象にする。

1-2. 先行研究、本論文の位置づけ、分析の枠組み

まず初めに、「居場所」という言葉が生まれた背景である。「居場所」や「居場所がない」といった表現はある時期まで存在しなかった。それが中藤によると1940年、ブロードウィンが不登校について研究を出したことがきっかけで、その後日本においても1950年代から登校拒否について唱えられるようになった。そして1980年代に入り、高度経済成長など現代の時代性や社会背景なども踏まえた上で、社会現象として不登校をとらえる必要性が認識されてきた。さらに小中学校における不登校での長期欠席児童・生徒数は2001年にピークを迎えたのち、若干減少したものの、2014年度では12万3千人に上るようになった(中藤 2017)。そんな中「居場所」という言葉が現れてきたのは1992年に文部省の出した報告による影響が大きく存在する。しだいに増加してきた不登校に関する報告書を提出し、その中で学校が心の居場所の役割を果たす必要性を提唱した。学校を、自己の存在を実感できる精神的に安心していることのできる場所として「心の居場所」の役割を果たす取り組みを行うことを定めたのである。この報告書では単なる居場所ではなく、「心の」という言葉がつけ加えられているように、それまでに言われてきた居場所よりも、物理的ではなく、より心理的な意味を強調したものになっていると言える(石本 2009)。ここから「居場所」という言葉が書籍や論文に登場し、世間に広まっていった。次いで、不登校の子供が民間施設に通うことを承認する動きが現れると、民間団体が居場所づくりのために動き始める。心理臨床の場面でも、居場所がないという感覚を抱く人々に対する支援がなされ、子供の成長過程における居場所の重要性も注目され始めた。さらに、2004年の文部科学省の「地域子ども教室事業」は子供の居場所づくりを目的とし、これに合わせて民営の「フリースクール」「フリースペース」なども居場所としてとらえられるようになった(藤原 2010)。このように、居場所とは比較的新しい言葉である。この意味は現在では意味も多様になり、重要な言葉となっている。しかしそのため、言葉の意味は確立しておらず、「居場所」が確立されたとしても何を基準になにをもって「居場所」とするのかは定まっていない。このため、この言葉を再定義し、実際に現在の若者に居場所はあるのか、あるとしたら何をもちょうのように感じるのか、また、その役割を考察することで居場所のない若者たちへ向けて解決方法を提示

したい。

1-3. 研究方法・調査方法

本論文は大きく分けて三つの章から構成されている。その一つ目は、先行研究の整理、二つ目はインタビュー調査を行った考察、そして最後に結論・今後の展望である。

まず先行研究を分析する前に、この論文での前提となる概念を確認する。そして現状について述べたうえで、先行研究をまとめ、分析していく。具体的には、居場所の定義を明らかにし、現代の若者の抱える困難について述べていく。そのうえで、居場所がある人となない人では何が違うのかを見ていくことを通して居場所の持つ役割というものを考察していく。さらに、現在日本では居場所を作るためにどのような取り組みがなされているのかをピックアップすることで居場所づくりへの世間の捉え方を理解する。

二つ目にインタビュー調査に関しては、まずは目的や形式、対象者、質問内容について述べる。インタビューの方法については完全に構造化された面接法と完全自由にインタビューするものの中間である半構造化自由回答法(上野 2018)で行った。そして、得られた結果をもとに若者、とりわけ慶應義塾大学の学生には居場所があるのか、あるとしたらどのような役割を果たしているのか、その成立過程や居場所の条件に共通点はあるのか、ということ进行分析する。

最後に、結論・今後の展望では、本研究の意義と限界を述べたうえで、インタビューを通して分析されたものを基本にして、先行研究と絡めながら、若者にとっての居場所の在り方を考察する。そして居場所がない場合の解決策を模索し、提示することを目標にする。

2. 居場所の定義

2-1. 居場所とは

上記に述べたように近年、居場所や居場所感の研究が重要視され、盛んになっている。「居場所」とは広辞苑によると「いるところ. いどころ」という物理的な空間を示す概念である。しかし現在では物理的な空間を指し示すだけでなく、文部科学省にも「心の居場所」とあるように、心理的な意味も表すようになり、非常に多くの場面で使用されるようになった。しかし、この心理的な側面を含めた「居場所」の定義は、いまだ確立しておらず、研究者によって「居場所」の捉え方はさまざまである(石本 2009)。居場所の概念は、心理的な面・物理的な面の二つの側面を含むため、研究も幅広く行われている。そのため、まず大きく研究分野を建築学、住居学などから成る空間面と、心理学、社会学、教育学などから成る心理面に分けて考える。

(1) 物理面

まず初めに、社会生活の拠点となる物理的な意味での場である。これは本来の居場所の意味であるものだ。物理的な居場所とは、明確な目的や機能を持つ場所というよりも町にさりげなく存在する場所であり、例えば、ショッピングセンターやコンビニ、アミューズメントパークや公園のようなところであり、様々な人が様々な理由で集まっている場所である。それはたいていの人にとって、生活に必需というものではなく、その場所を生活の中心に据えるようなものでもない。しかし、気の向いたときにフラッと気軽に訪れることができ、ちょっとした時を過ごすことができる空間である。行けばいろいろな人と出会い、いろいろな活動に触れ、刺激を与えてくれるところであるかもしれない(日本建築学会 2010)。こうした空間では多様な過ごし方が可能である。様々な振舞い方、自由な居方ができることは物理的空間の持つ大きな特徴である。館内での居場所を自由に選択でき、それぞれが思い思いに自由な過ごし方をすることができる。居場所は現在のように多様な意味でつかわれたとしても本来の物理的な「場」としての意味を失ってはいないのである(藤原 2010)。

次に、物理面を基にした、自由な場という意味の居場所である。この自由というのは様々な種類のものがある。まず、管理強制からの自由だ。これは、強制されない、直接的な管理から離れた場所や空間、権利が保障されている、といったものである。次に、活動・発言の自由である。これは自由に過ごすことができる、好きなことやりたいことができる、自分の趣味や関心に手中して取り組める場、失敗を恐れる必要がない場、自由に語れる、言いたいことが言える場といった意味のものである。そして、時間・ペース・選択の自由が次にあげられる。これは、いつでも来て、いつでも帰れる場、自分のペースでよい場、一定の時間が保障されている場、行ってもいなくてもよい場、子供自身が選んだ場といった定義が含まれる。そして、大人や権力からの自由。これは子供を中心とした居場所であり、大人から介入、干渉されない、子供だけで過ごせる、大人の目が行き届きすぎない、大人の目を避けられる場所と言ったものが含まれる。さらに、比較・超過からの自由という、誰かと比べられたり、評価されたりしないと言った自由、心理学を中心に用いられていた定義である、気軽に行ける、気軽に立ち寄れる場、誰からも脅かされない場という自由で開放感のある雰囲気といった自由な場があげられる(藤原 2010)。つまり物理面での居場所とは、空間が提供され、そこでは制約がなく自由に行き来できる場所となっている。

(2) 心理面

次に心理面における居場所について述べる。これに関しては、自分が自分であるための環境と定義する研究者もいれば、自分が社会に生きている証拠を確かめることができる場所と位置付ける研究者や、自分が確認できる場所、他者とのかかわりの中で自分の位置と将来の方向性を確認できる場所、安心して人といられる場所、自分らしくできる場所、心のよりどころとなる物理的空間や対人関係もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメタファー、心のよりどころとなる関係性及び安心感があり、ありのままの自分

を受容される場(中藤 2017)、一人で過ごせる場、役割が与えられる、所属感や満足感が感じられる場、他者や社会とのつながりがある場(藤原 2010)など、研究者によってそれぞれ違う心理的居場所の定義があげられている。しかしこれらの定義には、「安心」という要素、「自分」という要素が含まれているので、この要素は複数の先行研究に共通していると言える(中藤 2017)。

(3) 自己完結する場、他者との関係性の場

さらに、これら心理面を見てみると大きく二つの傾向に分けられていることがわかる。一つは自分だけで完結する場、もう一つは他者との関係性の中で感じられる場である。自分が確認できる場、自分らしくいられる場というのは自分だけで完結するものである。対して、他者との関わりの中で何かを感じる場、他者に受容、承認される場というのは相手との関係性が重要であるからである。これらは居場所の要素である。前者の、自分だけで完結する場というのは、本当に一人でいる場所の事である。もし仮に一緒にお弁当を食べる相手がいないとなると居心地の悪さしか感じない。人を探してその輪に入ろうとしてもそこに自分の場所がないとなると寂しさにつながる。さらに、周りの人達が一緒に何かをしていて自分だけその輪に入れず自分はここにはいけない人間、劣った人間だと不承認の想いを抱かせ、それが恥ずかしさに繋がることもある(阿部(真) 2011)。対して家にいて一人で好きな映画を見ていたり、小説を読んだり、音楽を聴いているときは自分の好きなことに没頭しているので寂しさや恥ずかしさを感じることはないだろう。従って、他に人がいない本当に一人で完結する場、もしくは他者とのつながりの中での場という二つに心理的居場所を分けることができる。

(4) 居場所の分類

この要素にも論者の重視する側面によって分類軸は異なり統一されていないが、複数の研究において共通していることがある。それは前述した、「個人的居場所」と「社会的居場所」である。前者は「開放的居場所」、「内省的居場所」の二つの要素からなり、後者は「承認的居場所」と「受容的居場所」、「所属的居場所」の三つの要素からなるとされている(中藤 2017)。個人的居場所とは、安心感を得られるという意義が大きいが一方で行き過ぎると、引きこもりの舞台となってしまう。とは言え、やはり一人で専有できる空間であり、そのような空間は緊張緩和、課題への集中、自己内省の効果があるとされている。そして社会的居場所とは、他者から必要とされ、自分の資質や能力の発揮が可能であるとともに、集団における自分のポジションを明確にできる場所である(浅葱、奥野 2018)。後述するインタビューについてはこの、個人的居場所と社会的居場所という類型にも注目したい。

このように「居場所」の定義、要素には様々なものがあり、議論が続けられている。人によってあってほしい居場所は違いうだろうし、正解もない。しかし、居場所はどこかと問われたときに思い浮かべるのは心理面か物理面かと言われたら、心理面の定義のほうが人々の

考える居場所に近いと思われる。それは、そもそも居場所という言葉が社会に出現し始めたのは、前述した通り、不登校が問題になったからである。不登校というのは心理的に追い詰められたことで発生する問題である。実際、もっとも初期に居場所に言及した北山は、社会的立場としての身の置き場ととらえており、同様の視点として、社会的意味合いを帯びた物理的身体の居場所と捉えている者もいる(石本 2009)。ここからも読み取れるように、社会的立場づけ、つまり心理的場所が強く存在することがわかる。そのため、居場所の概念は心理面に近くなると考える。だが心理面としての定義づけは上記に述べたように多く存在しており、統一されていない。しかし、安心できる場所、自分らしくいられる場所というのは複数の研究家の間で共通していることは確認した(中藤 2017)。そのため、本研究では「居場所」という言葉を仮に、自分が安心できる場所でもあり、かつ、自分らしくいられる場所でもあると定義しておく。そして、インタビューをした後にこの定義を再度分析していくつもりである。

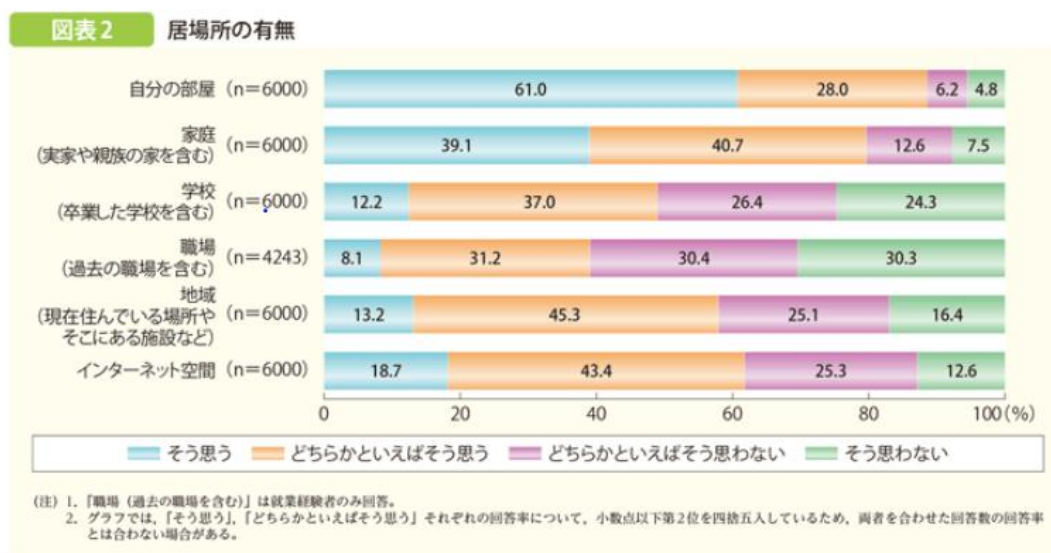
2-2. 若年世代の現状

前の章で、居場所という言葉の様々な定義を確認してきたが、他者との関係の中での場という定義も多く存在した。そんな中、現在の若者は実際他者とどのようなつながりの中に置かれているのか。そのことをこの章で確認したい。

そもそも人は一人では生きられない。一匹狼で生きようと思ってもそれは不可能なのである。なぜなら人は生まれてから小学校、中学校へ通い、その後多くの人は高校、大学、社会へ出て結婚、子育て、そして死というそれぞれのライフステージの中で常に誰かと支え合っているからである。この、人とのつながりというものは特に思春期や進学など、ライフステージ変更が数多く存在する若者にとってとても重要なものになる。そこで順調に進めばよいが、中には、学校や職場などの集団の中での人間関係がうまく築けなかったり、維持できなかったりしたことをきっかけとして、不登校、ひきこもりなどの状況になってしまう若者も現れる。また、はた目には目立った困難を抱えているようには見えない若者であっても、周囲と十分なコミュニケーションが取れずに孤立していたり、心を開いて悩みなどを相談できる相手がないなどの状況にある者も存在し、結果として彼・彼女らは、自分ひとりで悩みを抱え込む状況が続くことにより、様々な問題を複合的に抱えた状態に陥ることが懸念される。実際に、内閣府が行った平成 28 年 12 月に全国の 15 歳から 29 歳までの男女 6000 名を対象に実施したインターネット回答による「子供・若者の意識に関する調査」がある(内閣府 2017)。これによると、以下のことがいえる。

まず、図表 1 では居場所を〔1〕自分の部屋、〔2〕家庭、〔3〕学校、〔4〕職場、〔5〕地域、〔6〕インターネット空間の 6 つの場に分けている。その中で、それぞれ自分の居場所だと思うかをたずねた質問に対する回答をみると、肯定的な反応を示した「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」を合わせて、〔1〕自分の部屋が 89.0%、〔2〕家庭が 79.9%、

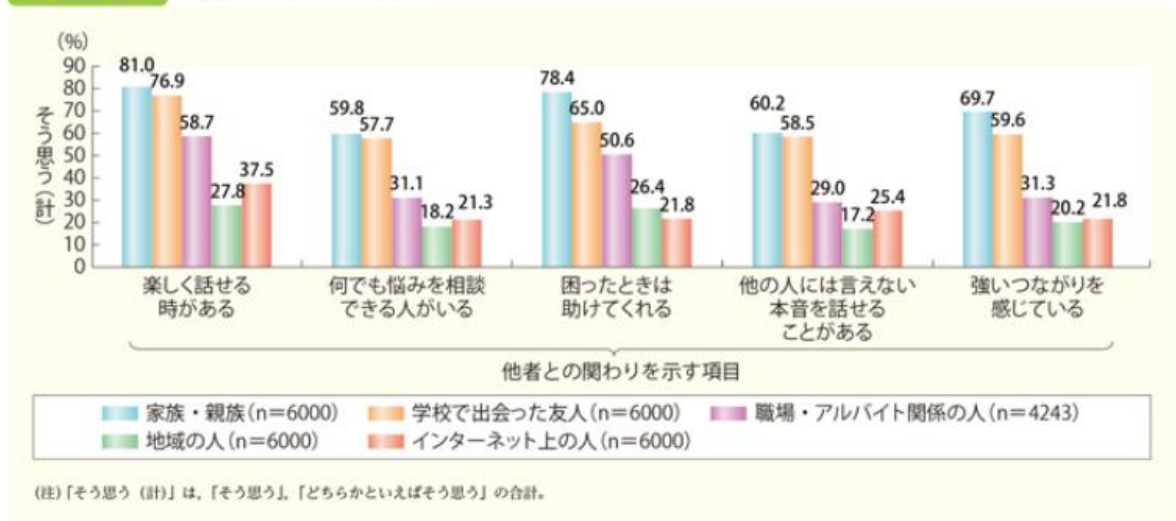
〔6〕インターネット空間が62.1%と、それぞれ比較的高い割合を占めている。一方、その三つに比べて〔3〕学校〔4〕職場〔5〕地域は低くなっている。つまり比較的自分の部屋や家庭、次いでネット空間に居場所を感じる割合が高いことが分かる。急激に浸透してきているネット空間は2020年現在ではさらに高くなっているかもしれない。



出典: 内閣府, 2017, 「特集 若者にとっての人とのつながり——居場所の状況」 (2020年8月2日取得, https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/s0_0.html) .

次に図表2では、若者が5つのカテゴリーに示される相手とどのようにつながっていると感じているかを見ることができる。つながりの対象は〔1〕家族・親族、〔2〕学校で出会った友人、〔3〕職場・アルバイト関係の人、〔4〕地域の人、〔5〕インターネット上の人の5つのカテゴリーに分ける。その回答をみると、肯定的な反応を示した「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」を合わせて、〔1〕家族・親族とは、「楽しく話せる時がある」と回答した者の割合は81.0%、「困ったときは助けてくれる」は78.4%、「強いつながりを感じている」は69.7%とすべての項目において高い割合であった。次いで、〔2〕学校で出会った友人とは、「楽しく話せる時がある」と回答した者の割合は76.9%、「困ったときは助けてくれる」は65.0%、「強いつながりを感じている」は59.6%と家族・親族と僅差の結果となっている。つまり、家族・親族と学校で出会った友人との間に、楽しく話したり、悩みを相談したり、助け合ったり、本音を言ったりするなどのつながりの強さを感じている若者の割合が大きいことがわかる。その一方で、〔3〕職場・アルバイト関係の人、〔4〕地域の人、〔5〕インターネット上の人との間では、〔1〕家族・親族や〔2〕学校で出会った友人と比べて、つながりの強さを感じている若者の割合はそれほど大きくないことがわかる。しかしインターネット上の人に関しては少し割合が高くなっているところもあり、若者にとってのネットの大切さが垣間見える数値となっている。

図表4 対象別のつながりの強さ



出典: 内閣府, 2017, 「特集 若者にとっての人とのつながり——つながりの状況」(2020年8月2日取得,

https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/s0_0.html) .

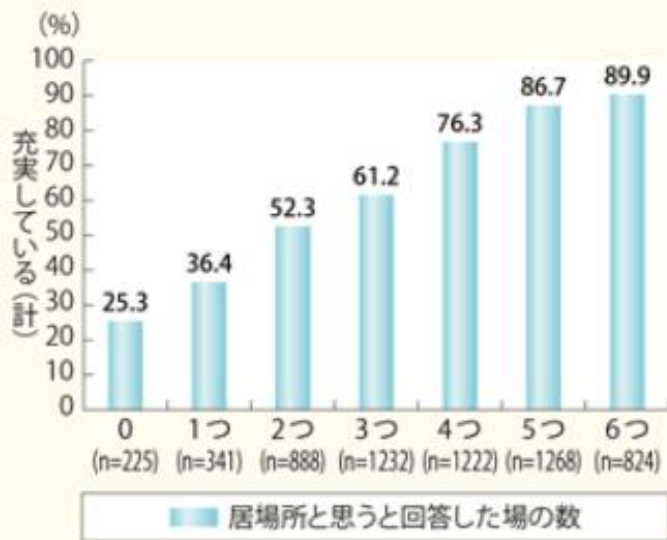
この二つのデータから考察されることは、若者は自分の部屋、家庭、ネット空間に居場所を感じる割合が高いが、つながりの強さとしてはネット上の人物よりも家族や友人のほうが気の置けない関係になる傾向があるということである。一方で、人間関係に関する悩みがある人の割合は、人間関係に悩みのない人の割合よりも高いというデータもある。その具体的な悩みとして、相手にどう思われているのか心配といった他者懸念、劣等感、対人スキル不足、ありのままの自分が出せない、異なる他者との共存などがあげられている。(高井2008) つまり友人とはつながりが強い一方で、その友人関係に悩みを抱えている若者も多く存在するのである。

3. 居場所がないことの問題と居場所の役割

3-1. 居場所がないと何が問題か—居場所がある人とない人—

前章では居場所の意味、現在の若者の居場所の有無・つながりの感じ方について考察した。この章では、そもそも居場所がどうして必要なのかということについて述べていく。内閣府調査に居場所とじている場所の数や、つながりが生活の充実度や将来に対する意識にどのような影響を与えているか調べたものがある。図表3によると、居場所だと思場所が0個の人で生活が充実していると答えた人は約25%、一方で居場所が6つあると感じる人は約89%の人が充実していると回答した(内閣府 2017)。

図表9 居場所の数と生活の充実度

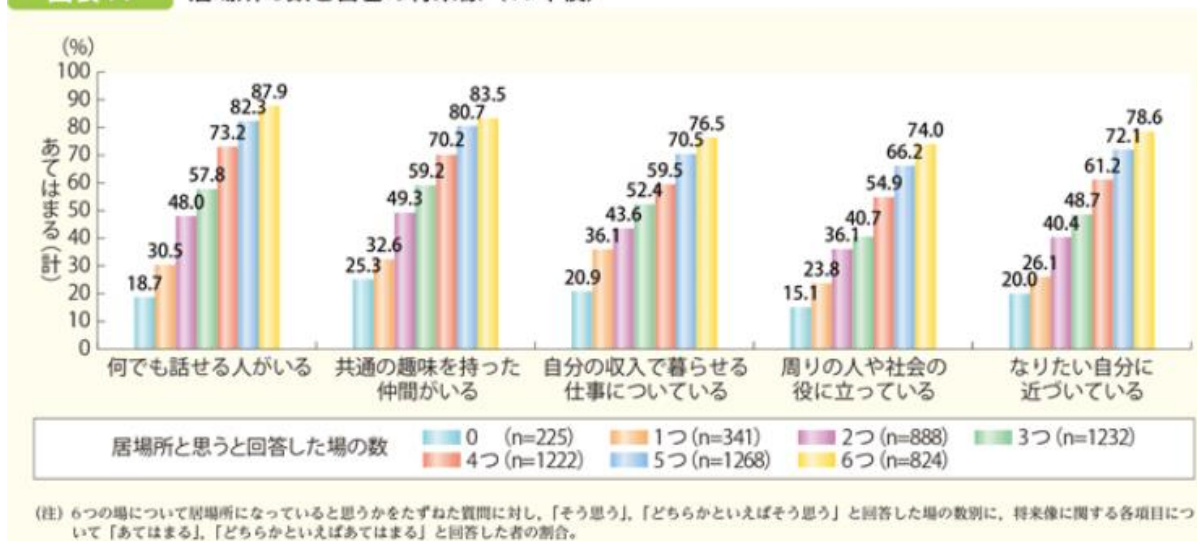


(注) 6つの場について居場所になっていると思うかをたずねた質問に対し、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した場の数別に、現在の生活について「充実している」、「どちらかといえば充実している」と回答した者の割合。

出典: 内閣府, 2017, 「特集 若者にとっての人とのつながり——居場所及びつながりと生活の充実度」 (2020年8月2日取得, https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/s0_0.html) .

また、図表4からは、居場所であると感じている場所の数と自己の将来像についての関係を見ることができる。これを見ると、一貫して、居場所であると感じている場の数が多くなるにつれ、生活の自立や社会への貢献、対人関係等について前向きな将来像を描く傾向の回答割合が高くなっていることが分かる。

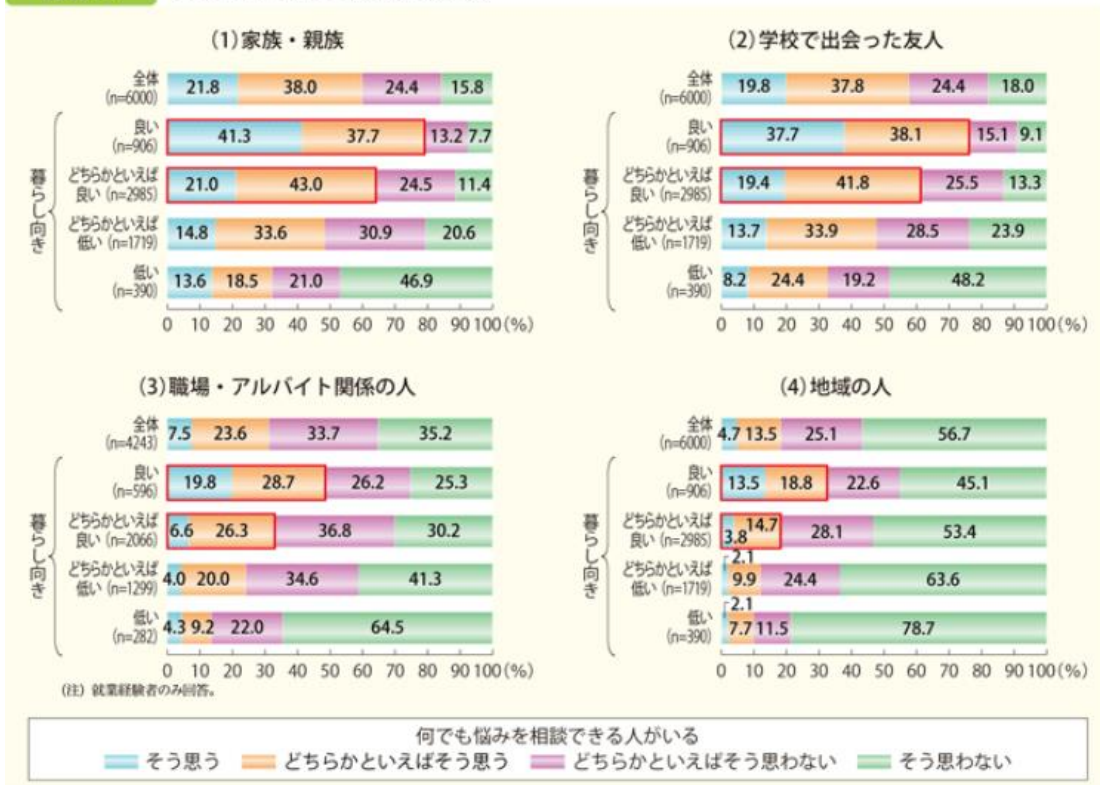
図表 11 居場所の数と自己の将来像（10年後）



出典: 内閣府, 2017, 「特集 若者にとっての人とのつながり——居場所及びつながりと自己の将来像」 (2020年8月2日取得, https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/s0_0.html) .

これまでではつながりの強い人についてみてきたが、今度は、つながりが比較的弱い状況にあると思われる若者の特徴についてみてみる。図表5に、現在の暮らし向きをたずねた質問に対し、「良い」、「どちらかといえば良い」、「どちらかといえば低い」、「低い」と回答した者それぞれについて、家族・親族、学校で出会った友人、職場・アルバイト関係の人、地域の人とのつながりをたずねた質問項目がある。このうち、「何でも悩みを相談できる人がいる」についての回答をみると、いずれのつながりにおいても、現在の暮らし向きを良いと感じている者の方が、暮らし向きが低いと感じている者に比べて、「そう思う」と回答した者の割合が高くなっていることが分かる。つまり、つながり度合いが低く、暮らし向きが悪いと、悩みを相談する相手が少なくなるのである。

図表14 暮らし向き別のつながりの認識



出典: 内閣府, 2017, 「特集 若者にとっての人とのつながり——暮らし向きとの関係」(2020年8月2日取得,

https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/s0_0.html) .

3-2. 居場所の役割

上記の結果から、居場所がある若者のほうが、自らの生活が充実していると感じる割合が高くなっていることが分かる。また、生活の自立や社会への貢献、対人関係等について前向きな将来像を描かせることも考察される。さらに、人とつながっているという意識を持つことで悩みを持ったとしても一人で抱え込むのではなく、相談できる他者が存在することが分かる。誰かに相談することができれば若者の孤立や引きこもりを防ぐ手立てになるだろう。若者が成長し自立する過程では、誰もが悩みを抱えたりつまずきを覚えたりすることがある。しかしその際に大事なことは、ひとりで問題を抱え込み困難な状態に陥ってしまうことを防ぐことである。そのためには、普段から家庭の他にも自分がほっと一息つくことのできる、居心地の良い場所をできる限り持つとともに、何かあった時に支えとなってくれる人との関わりを築いておくことが大切であると考えられる(内閣府 2017)。

逆に、居場所がないと感じている若者は、現在の暮らし向きに対する認識が良くないと感じると共に、生活の充実度も低くなっている。そして、社会貢献や対人関係等にも不安を覚

えている割合が高くなってくると考えられる。このような人たちは居場所がないことから他者との関わりも必然的に少なくなる。そのため、何でも話せる他者がおらず悩みを抱えたときも一人で何とかしなくてはいけないという悪循環に陥る。

また、居場所がないことは自分の心身の安心を感じる場所がないと言っても過言ではない。例えば学校や職場には自分の机と席があり、自分の持ち物が置いてある。そこに長時間座っていても誰も文句を言わない。それどころか友達や同じ職場の同僚とあいさつを交わすかもしれない。この時感じるのは大きな安心である。「ここは私の居場所だ」「私はここにいてもいいのだ」という安心。これは動物的と言っても良いほど、私たちの心身の根幹にあることだ。しかしこのように安心できる場というのはこの広い社会の中に実はあまり存在しない。上記のデータの通り、部屋や家庭という、居場所だと感じる割合の高かった場所では安心できると思う。しかし一歩外に出たら意外と居場所を感じるができない。職場や学校がなければどこかに身の置き場を見つけることは難しいことなのである。お金さえあればホテルの部屋を借りたり、カフェで何時間もつぶしたりスーパーやデパートをうろうろすることはできるとしても、財布の中身が寂しかったり、長時間いることができないことに気づく。一見、誰にでも開かれているように見える商店街や地下街やビルの軒下であってもそこに長時間いれば警備員がやってきて追い出される。誰でも使える公園や河川敷さえ安心して居続けることは難しい。いわゆるホームレス問題が深刻化した1990年代、多くの都市では長椅子型のベンチが取り除かれ、一人ごとに仕切りがあるベンチや、最もひどい例ではパイプ型のベンチに取り換えられた。ホームレスの人が横になるのを防ぐためである。しかしこれには足腰の不自由な高齢者や赤ちゃんを抱えた男女など、公園で座ることが必要な人々でさえ長くは座れないであろう(阿部彩 2011)。このように、一歩外に出ると若者だけではなく社会的弱者も安心する場を失いつつある。

以上の事から居場所の役割は様々に見ることができる。そして居場所がないことは、安心して休める場所のないこと、そこにいてもよいと社会から認められている場所がないこと、他者とのつながりが欠如すること、悩みを一人で抱え込むしかないという問題につながるものが考察される。つまり、居場所がないと感じる人については、居場所がある人と比べて孤立する可能性が高いのである。このことから、彼・彼女らには経済的支援や就労支援に加えて、孤立から守り、その成長を支援する居場所とつながりを作り出す取り組みが求められる。また、現在学校に在籍しているにも関わらず、周りとのつながりの強さをあまり感じていない者についても、孤立することから守り、居場所とつながりを作り出す取り組みが重要である。これらの課題に対応するためには、行政や政府が実施する各種の支援策だけでなくNPO 法人等民間団体による、若者に寄り添い、若者を社会とつないでいく、きめ細かな取り組みに期待されるところも大きいと考える(内閣府 2017)。

3-3. 居場所づくりのための取り組みにはどのようなものがあるか

前章で述べたように、居場所がないと一人で抱え込むことが増え、人や社会とのつながりを持たなくなってしまう。そのような若者の孤立化を防ぐために居場所づくりとして何ができるのだろうか。実際に既に行われていることがある。以下ではその具体例を述べようと思う。

まず、大阪の千里ニュータウンの近隣センターの空き店舗を利用した「ひがしまち街角広場」である。ここはボランティアによって運営されており、飲み物が100円で提供され、気が向いたときにふらっと訪れ、ゆっくりと過ごせる場所になっているようだ。人々は居合わせた人やボランティアとおしゃべりをしたり、おしゃべりには加わらず耳を傾けたり、一人で本や新聞を読んだりしている。週に一回とか月に何回という開催では行ってみようと思ったときにいけないため、いつでも開いているという安心感をもたらすことを目的に、週6日運営されている（日本建築学会 2010）。

次に、元銀行の建物を利用してオープンした佐倉市ヤングプラザである。ここは学校でも家庭でもない、放課後の第三の居場所になり、目的なくいられる場所を目指したものだ。若者はここへ来てゲームをしたり試験勉強をしたり、本や雑誌、テレビを見たり、多目的室でバンド練習をしたりとそれぞれ思い思いのことを行っている（日本建築学会 2010）。

また、フリースクールのようなシューレもある。中学校の教師が中心となって設立した東京シューレがその例として挙げられる。ここで子供たちは自由かつ自主的に学習でき、生活時間を過ごす。通っている子供の年齢は6～20歳と幅広くいる。ここで行われていることは、学校のようにスタッフが子供に勉強を教える講義や、子供たち同士で主体的に勉強を行ったりもする。このとき時間割や授業内容は予め先生が決めるのではなく、子供たちがミーティングをして話し合っただけで自主的に決定する。また、日によってみんなで料理を作ったり、工場の見学をしたり、ハイキングなども行っている（日本建築学会 2010）。

連日200人を超える来場者がある、ゆう杉並という場所もある。一階にはロビーとホールがあり、子供たちはおしゃべりやカードゲームをしている。また、地下には体育室と工芸調理室があり、中高生のレベルに合わせた質の高い講座の実施も行っている。ダンス教室やボーカル講習会、フリークライミング講習会などいずれもその道の専門家を講師に招いて行っている。ここでは「いろんなジャンルに挑戦できて楽しい」「同じ目的を持った友達に会える」といった参加者の声が聞かれる。つまり、ここではチャレンジや出会いの場を提供できているのである。工芸調理室では、美大や料理学校の先生が講師になり陶芸やお菓子作りなどを行っている。中高生たちは学校も学年もバラバラだが、同じ目的に向かって活動しているのである。ここに来る子はバンド練習やダンス練習など目的を持った子もいるし、ただおしゃべりをしに来るだけの子もいる（久田 2000）。それぞれ目的の違う、たくさんの人々が集まるのである。

これらのように様々な取り組みが自治体や民間、NPO団体などによって現在行われている。これらの居場所に共通して言えることは、誰にでも開放され、その場においても否定されないということだと感じる。自分の好きな時にいつでも気軽に行くことができ、拒まれず、

そこで行うことはほとんど制限されない。そして、たまたま居合わせた人とつながることもできる。出会いによって何か変わっていくものがあるかもしれない。このような、学校でも職場でも家庭でもない、社会学者オルデンバーグが、非公式的な公共の居心地よい集いの場と述べるようなサードプレイスが若者には必要ではないだろうか。相手との関係が深いわけでも浅いわけでもなく、自由に、しかし気軽に相談できる場所がある。これがあることによって安心感をもち、他者とのつながりによって孤立することもなくなるのではないか。つまりサードプレイスは、誰でも立ち寄りやすい、開放的な場であることで、出会った人々がふれあい、人と人との間に絆が生まれ、様々な助け合いに発展していくと考えられる。

4. インタビュー調査

4-1. インタビューの目的と形式

前章までを踏まえてこの章では、実際に現代の若者にとっての居場所はどのようなものとなっているのか、インタビューを行う。

インタビューの目的としては、居場所がない人がこれから居場所と思える場を作るためにどうしたら良いのか、少しでもその助力となることを目指す。そのために現代の若者にとって居場所はあるのか、あるとしたらどのような役割を果たしているのか、その成立過程などを尋ねることで共通する居場所の条件などはあるのかを明らかにしていきたいと思う。

その対象としては、先に述べたように大学生としたい。その中でも、2020年に就職活動を行った4年生を対象を絞る。就職活動は将来に大きく影響する、人生の大きな節目となる出来事である。そして、誰もが一度は不安になるだろう大きな悩みとして存在する出来事でもある。それに加えて2020年の就活生は、2019年12月に中国の武漢市で発生し、世界中に感染が拡大したと考えられている（忽那 2020）新型コロナウイルスによる影響も受けた。日本国内では2020年4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に政府が緊急事態宣言を出し、生活の維持に必要な場合を除いて外出の自粛を要請され、学校に通うことも友達に会うこともできなくなった。そして4月16日には全国に要請が拡大され、5月25日に解除されることとなった（NHK 2020）。このような例年にならぬ例外的な事態が発生したことで、会社説明会や面接が中止されたり、次回の選考日程がなかなか決まらない、対面での説明会や面接が実施されず全てオンラインで完結する、企業が採用人数を予定より減らしたり、そもそも今年度の採用を中止したりなど就職活動は更なる困難に陥った。実際に21年3月卒業予定者の採用見込みについて、採用が減少すると考える企業が、増加すると考える企業を上回ったのは、リーマンショック時以来となり、近年続いてきた売り手市場に陰りが見え始め（NHK 2020）、就活が長期化しているという調査もある（SankeiBiz 2020）。そのような困難の中で就職活動という大きな悩みを抱えて日々を過ごした4年生にインタビューをすることで、悩みがある中で居場所がどのような役割

を果たしたのかを探ることができる。また、いつもの日常が一変した状況である新型コロナウイルスによって、自粛をしなければいけないという事態になったことで、物理的空間が制限されるようになった。そのことによって居場所に何か変化が起きるのではないか。そのため、新型コロナウイルスが発生する前と発生した後両方に着目してインタビューを行う。そこを比較することで居場所の役割に加え、捉え方や背景を検証していきたい。

インタビューの形式としては、予めいくつか質問を用意しておき、相手の回答によって自由にインタビューをする半構造化自由回答法(上野 2018)で行う。その際、インタビュー対象者が自由に回答でき、答えが一つとは限らないオープンエンドな質問をする。対象者の選定にはスノーボールサンプリングを用い、約1時間、原則としてオンラインで調査を行う。また対象者には、回答を卒業論文執筆のために文字、音声として記録し、これがインターネットで公開されることの承諾を得た。

4-2. インタビュー結果

インタビュー調査は下記の6人に行った。

Aさん	性別：女性 出身：神奈川 大学在学中：実家暮らし バイト：大学一年から一つ サークル：二つ所属だがほぼ行っていない
Bさん	性別：女性 出身：大阪 大学在学中：一人暮らし 新型コロナウイルスが発生後：実家暮らし バイト：派遣バイト サークル：一年間だけ一つ
Cさん	性別：男性 出身：福岡 大学在学中：一人暮らし 新型コロナウイルス発生後：実家暮らし バイト：大学一年から一つ サークル：無所属
Dさん	性別：男性 出身：神奈川 大学在学中：実家暮らし バイト：大学一年時一つ、二年時一つ、三年から現

	在まで一つ サークル：大学一年から一つ
Eさん	性別：男性 出身：東京 大学在学中：実家暮らし バイト：大学一年時一つ、二年時から現在まで一つ サークル：大学一年から二つ
Fさん	性別：女性 出身：神奈川 大学在学中：実家暮らし バイト：大学一年から現在まで一つ、二年終わりから現在まで一つ、一年終わりから二年終わりまで一つ サークル：大学一年から一つ

(1) Aさん

まず初めに新型コロナウイルスが起きる前について尋ねた。Aさんには居場所が複数あった。具体的には、中学生・高校生のときに6年間学校が一緒に、一対一で喋れる付き合いの長い友人といるときや、大学で1年生のときから仲の良い人、家族、バイト仲間である。また、物理的空間として一人で過ごせる自分の部屋も居場所だった。

それらを居場所と感じていた理由としては、Aさんは普段から信頼できる人にしか相談しない性格で、上記の人たちは自分の特性も知ってくれている人だから就活などの悩みも相談できるし、なにより一緒にいて楽しいからだと言っていた。また、一人でいれる部屋も必要だが、友人や家族の方が大事だと答えた。そのため、部屋という物理的空間よりも人といるときという心理的側面の方が大切に思っているようだった。心理面の中で居場所と思っている割合としては、家族と中高大生の友人が同じくらい、次いでバイト仲間がくるようだ。

もしもその居場所で嫌なことがあったら、一回抜け出して自分が落ち着いてからまた戻るようだ。例えば、家族と喧嘩したときは自分の部屋にしばらく閉じこもって冷静になり、自分の好きなことをして、ストレスが抜けたらもう一回話し合いに行くと言っていた。

次に、新型コロナウイルスが起きた後のことについて尋ねた。物理的側面における居場所は変わらないようだったが、心理的側面における居場所は減ったようだ。家族とは喋る機会が増え、話すことも多くなったようだが、大学の友達とはラインやzoomでたまに話す程度で、対面で会うことができず悩みを友人に打ち明けづらくなっただけ。また、中高の友人は相手の就活状況などが分からず、ラインもしにくかったため、あまり会わなかった。しかしバイト仲間とは以前より仲良くなったようである。というのも、バイトをする頻度も

週に1, 2回から週4, 5回に上がり、感染が怖いため物理的に距離の近いバイトにしか行かず、顔を合わせる機会が増えたのが理由のようだ。しかし後輩が多かったので同じ状況の人がバイト先におらず、悩みを相談するのは主に家族で、コロナ前よりも物理的な距離も友人との距離も範囲が狭まったようだった。

そして就活中に悩んだ時には、自分の状況を分かってくれている家族と、コロナ前から仲の良い大学の友達数人に相談したことで乗り越えたようだ。関係性の薄い人には相談せず、彼等に相談することで、同じ立場だから理解を示してくれて安心にも繋がったと言っていた。つまり、居場所があることで最後の決め手になったり、悩んでいるときに相談できたことで乗り越えられたようである。逆に、もしもその居場所がなかったら、焦りや不安が勝り、精神的に不安定だったと思うと語ってくれた。居場所があったことで精神的に安定していたようだ。

最後に、Aさんにとって居場所とは、自分の素を出せるところで、自分の良いところだけじゃなくて悪いところも見せられるところであると伝えてくれた。

(2) Bさん

まず初めに新型コロナウイルスが起きる前について尋ねた。Bさんには居場所がたくさんあった。具体的には、一人暮らしの自分の部屋や大学の様々な友達との遊び、何人かのグループで遊んだり飲んだりすること、家族である。友達は関係が浅くても深くても、一緒に遊ぶと楽しいからどんな関係の人とでも良かったという。家族については、一人暮らしだからたまに実家に帰省したときに会うと安心する場所だと言っていた。自宅は一人で冷静になれるからそのような場所も必要と言っていた。つまり、物理的空間としての自宅と心理的な場としての何人もの友達、家族がコロナ前にはあったようだ。

そして、もしそこで嫌なことがあったとしたら他の居場所を探すと思うと言っていた。仮に部屋が嫌になったら友達のところに行ったりショッピングに出かけたりするし、ある友達といて本当に嫌なことがあったら他の友達のところに行くかもしれないと語ってくれた。

次に新型コロナウイルスが起きてからのことについて述べていく。Bさんは物理的側面においての居場所も心理的側面においての居場所もこの期間に減ったようだ。状況としては、この時期は緊急事態宣言も発令され、あまり外出できる雰囲気ではなかったから一人暮らしの自分の部屋にずっといて、実家には数か月間だけ帰ったようだ。そして、一人暮らしで大学の近くに住んでいるとはいえ、大学の友達とは対面で会えないから電話をして交流を図っていたらしい。しかし電話は普段の遊びのように何人かのグループでできるものではなく、一対一で行っていたからどうしても交流できる人数はコロナ前より減っていたようである。その電話の相手としては、昔からの友達が多かったようだ。また、コロナ前はゼミの後輩とも会っていたけど連絡をとらなくなってしまったらしい。そのため学年を跨いだ交流はほぼなく、同期の、それも限られた人数としか接することができなくなったようだ。帰省している間は家族とずっと一緒にいたらしい。

zoom と対面では対面の方がいいようだ。オンラインだと相手の表情などが読みづらく、気を使う部分も増えるからである。

コロナ前からの居場所感の変化としては、友達が厳選され、減ったことと、自宅が居場所とは感じなくなったことだ。この期間中は部屋に居ざるを得なかったことで、ずっと家にこもるのが嫌になったからのようだ。というのも、自宅が一日中過ごす日常になってしまい、ほどよく日常から逃れられる場所ではなくなったから嫌になったそうだ。例えば、学校という日常で嫌なことがあっても、家という逃げ道があるが、学校にも通わずずっと家に居たらそこで嫌なことがあってもどこにも行けないのと同じことのように。つまり、日常にストレスを感じると他の非日常の場所を求めららしい。一つの場所に依存しすぎると居場所とは感じなくなるようだ。

そして、就活中は友達に話すことで困難を乗り越えたようだ。大学の友達と電話で話すことで自分の話したいことを喋れ、相手も聞いてくれたからリラックスできたし、特に、圧迫面接をされたときには友達に相談したことで心が落ち着いたと言っていた。家族は距離が近すぎて、自分のきいてほしいこと以外も深く聞いてくるからあまり落ち着かなかったようだ。また、ずっと実家にいると一緒に過ごしすぎて関係が良好にはいかなかったらしい。そのため、もし相談できる友達がいなかったら最終的には立ち直ったと思うけど、立ち直る速度が遅くて、それまでに何もやる気が起きなかったと思うと言っていた。

そして、Bさんにとっての居場所とは、何かに強制されずに自分から向かうところで、日常のストレスから離れて、心をリフレッシュできるところである。また、色々行って自然に続いているものが居場所で、居場所にするのだと最初から選ぶものではなく勝手に厳選されているものだと言っていた。

(3) Cさん

まず初めに新型コロナウイルスが起きる前について尋ねた。Cさんには居場所が複数あった。大学から初めて上京してきたCさんは、東京に知り合いが誰もいなかったが、今までと同じように担任の先生とクラスメイトという関係が作られる学校やゼミの空間にいる人、学外のボランティア活動の人が東京でも居場所になっていたようだ。また、実家に帰る時は、ずっと育ってきた地元や、自分のことを一番よく知っている両親と一緒にいるとき、親戚や、付き合いが長く勝手がわかっている中高の友人が居場所になっていたようだ。場所的にも長く過ごした地元が居場所だったらしい。でもそれよりも近くにいる人との繋がりという意味で一番居心地が良く、たまに帰省すると地元いいなと思えていたようだ。そして、実家は居場所であるが、上京して一人暮らしをしていた部屋は居場所とは感じなかったようだ。学生マンションのため、他の住人を誰も知らず、自分だけしかいない空間だったからそう思っていたようだ。そのため、人と人との繋がりや居場所かどうかを判断していたのであろう。

もしそこで嫌なことがあったらBさんと同じく、他の空間に行くようだ。一方がだめでも他に行く場所がある状態のため、もし居場所が一つしかなかったらしんどいと思うと話し

てくれた。

次に、新型コロナウイルスが起きた後のことについて尋ねた。この期間は帰省していて、物理的側面、心理的側面ともに居場所が減ったようだ。しかし減った分、残った居場所でのつながりが強くなっていった。まず新型コロナウイルス前に交流のあった大学の友達やゼミの人とはオンラインでの繋がりはあったが、パソコンでは限界があり、連絡をとらなくなって居場所とは感じなくなったようだ。そしてその後東京に戻っても再び連絡を取り始める可能性は低いと言っていた。逆に、物理的に直接触れ合える地元の人とは会う頻度も上がり、親密になったようである。両親とは毎日一緒にいると喧嘩もするけれど居場所であり、喧嘩をしても地元の友達にすぐ会いに行けるから苦にはならないらしい。やはり今までの人生で長い時を一緒に過ごした人の方が長く喋れるし、できるなら東京に来るよりも地元にて居心地の良い地元の人たちと一緒に居たいようだ。つまり、学校やボランティア活動は居場所でなくなり、地元だけが居場所になった。ゼミは週に一度オンラインで行われていたけどそこは居場所感はなかった。そのため、居場所が減った代わりに地元との結びつきが強くなったようである。物理的に会ってその場の空気を共有しないと居場所感がないため、zoomなどでは居場所と思っていた所とも疎遠になってしまうようだ。そして、zoomは続けたくはないようだ。オンラインはタイムラグや、目線もあわず、想いが半減してしまう。同じ空気を吸ってボディタッチやタイミング、合いの手など微妙なニュアンス含めてのコミュニケーションができなくなってしまうからだ。

また、就活中悩んだ時には、居場所が役立つらしい。自分の不安を共有できる親や地元の友達に、口に出して言葉にすることで落ち着き、一人で悩みこまなくて済んだようだ。大学の友達は1、2年会っただけで自分のことを深く知らないから、長い付き合いの地元の人に話すことで、自分の事を全て肯定してくれて気持ちが軽くなったと言っていた。つまり、時を一緒に過ごせば過ごすほど居場所になるのだろう。

そしてもしも地元がなく東京にいたら、就活中病んでいたかもしれないそうだ。大学の友達は同じ就活をしているライバルで相談しにくいのが、地元の人にはライバル意識がなく大学も志望業種も全く異なるから相談できたようだ。

Cさんにとって居場所とは、自分が辛くなったりきつくなった時に逃げて帰ってこれて、何でも受け入れてくれる、無条件の愛を注いでくれる場所だと話してくれた。

(4) Dさん

新型コロナウイルスが起きる前について、居場所は複数あったようだ。特に気心を許せる友人の多かったサークルを居場所と感じ、その部室も居場所だった。また、一番長く時間を費やしていたバイトや、人数が少なく、週一で接する機会のあるゼミも居場所だった。一方で一年生の時の語学のクラスは二年間続けるべきものを一年間で辞めてしまったから居場所とは感じなかった。

もし居場所で嫌なことがあったら、気まずい状況が嫌だから解決策を探し、違うコミュニ

ティを探していたようだ。

次にコロナが発生してからのことである。バイトはシフトがなくなったため、居場所とは感じなくなっていた。その一方サークルは、部室にも行けなくて活動がない中でも個人的に交流を持っていた人たちがいたため、居場所と感じていた。また、ゼミはオンライン授業やオンライン飲み会を開催していたため、繋がりを保てたようだ。つまり、コロナ前から引き続き、サークルの友達とゼミは居場所だったようだ。しかしやはり zoom だと場がないし、場の雰囲気わからず、対面より話が盛り上がらないため、オフラインがいいようだ。

就活の悩みはOB訪問をした先輩に相談していたようだ。サークルやゼミなど気の許せる友達には相談しなかったようだ。その理由としては、仲のいい人ほど就活や受験勉強などの努力を見せないで結果を出した方がかっこいいからということだった。とはいえ相談相手はほしいので、OB訪問をした人が優しい人で良かったといっていた。

Dさんにとって居場所とは、存在しなきゃいけないもの。どの時期にもなくてはいけないものである。

(5) Eさん

コロナ前については、サークル二つと自分の部屋を居場所と感じていた。環境に変化についていくのが大変だった中、aサークルには同じ学部の人が多く、大学で一番最初に友達もできて心強かった。サークルに行ったら誰かしら居る安心感もあったようだ。bサークルでは代表をやっていたこともあり、大きな歯車になれたし、自分がみんなの居場所を作るためにまず自分の居場所になったようだ。また、プライベートでは会わなかったけど週二回の少人数の練習で距離感も近く、ずっと同じ競技をやってきた人たちだから親近感もわいていたようだ。そして、自分の部屋では一人になれる空間だから居場所のようだ。

もしそこで嫌なことがあったら、自分から謝ったり、先輩に相談すると言っていた。

次にコロナが発生してからのことについてである。aサークルではラインでたまに連絡を取ることやオンラインで話すことが数回あったが、活動もなくたまに会う程度だから居場所感は薄れてしまったようだ。一方bサークルではオンライン飲み会が複数回あり、居場所感が強まったようだ。代表だったから自分から誘ったりと動きやすく、後輩からも頼られ、同じ就職先を目指す仲間もいたことが良かったようだ。自分の部屋は、いる時間が増え、変わらず居心地も良かったようだ。

このように zoom で人に会うことがほとんどだったが、zoom だと声が機械音で感情の機微が分からず、喋りにくさを感じていたようだ。

就活中悩んだ時は、居場所が役立っていた。仲の良い人とはお互い何でも話せるし出掛けることでリフレッシュにもなり、ポジティブに考えられたようだ。もしその場所がなかったら少しネガティブになっていたかもしれない。全部一人で抱え込むことは辛いようだ。

最後に、一緒に過ごせば過ごすほど居場所になり、ここは楽なところで沈黙していても楽しいところと感じるようだ。

(6) Fさん

コロナ前について、居場所はクラスの子、サークル同期や先輩、バイト同期、高校同期、リビングを挙げてくれた。その理由としてクラスやサークルは、同期に同じ学部の人が多いため、授業も被っていて必然的に会う頻度が多かったからのようだ。サークルの先輩は一緒にチームを組んだり、飲み会とかで話しかけてくれるのが楽しかったようだ。バイトの同期は先輩が厳しいから、それを共有できる仲間として存在していたようだ。高校同期は、大学に入学して友達がたくさんできたわけでもなかったから、高校の時も仲良かった延長で繋がりが継続していたようだ。そしてリビングは居心地の良い、あったかい場所のようである。もしそこで嫌なことが起こったら、少し距離をおいて他の居場所に行ったり、新しくコミットできる場所を探すと言っていた。

コロナが発生してからは、サークルの人とは会ってはいけないと思って関わりが少なくなったが、夜にゲームで繋がることは増えたようだ。クラスは授業がなくなったため繋がりが薄れ、バイト同期は居場所としての関わり方に変化がなかったようだ。一方で高校同期は居場所感が増えたようだ。今まではそれぞれの大学生活が忙しく、予定が合わなかったが、コロナによって活動がなくなったために話すようになったらしい。また、リビングはいる時間が増えたことで居場所感が増していた。そして、就活のコミュニティが新しく居場所として成立したようで、同じ業界志望の子と情報交換などを行っていたようだ。

zoom はバイト以外の居場所ではよく行っていたが、あまり好きではないようだ。対面だと声が被っても大丈夫だが、zoom では一人しか喋れないし、対面と会話の仕方が違うからである。そのため、対面で会える選択肢がないときはzoom を使いたい、それ以外は対面がいいようである。

就活中にはサークルのコミュニティがあつてよかったようだ。自分の話したいことを何でも言えたからである。一方、高校の同期は受けている会社が被っていたからあまり悩み解決にはつながらなかったようだ。

Fさんにとって、自分を偽ることなく居られる空間、変に作ったりしないでありのままの自分を出せるところが居場所であるようだ。

4-3. インタビューからの分析・考察

これらの語りをまとめるとまず、居場所の種類としてはバイト、ゼミ、サークル、両親、自分の部屋を挙げる人が多かった。そこが居場所になっていた理由は、その場にいると楽しかったり気どころが許せたり、安心できる場であったからのようだ。コロナ後は学校の友人よりもバイトや、中学高校や地元など昔からの友人が居場所になっていた。学校の友人とは家が遠いため、オンラインで話すしかできなかったが、バイトや、昔からの友人は家も近く、昔からの結びつきがあつたり対面で顔を合わせる機会もあつたから居場所が変容していた

ようである。一方で先述した内閣府調査にあった、インターネット上のコミュニティを挙げ
る人は誰もいなかった。そして自分の部屋は、一人で安心できる個人的居場所として機能し、
バイトやゼミ、サークルなどは、共通点や気心の許せる場所、所属的、受容的、他者からの
承認の場としての社会的居場所として機能していたことが分かる。つまり、異なる役割を持
つ、個人的居場所と社会的居場所の両者が必要とされていた。

次に、対象別のつながりの強さとしては内閣府の調査と同様、学校で出会った友人が強か
った。しかしコロナが発生してからは、学校で出会った友人を居場所と感じる程度がほぼ全
員低くなり、その代わりに活動していたバイトや、大学前からの友人を居場所と認識する度
合いが増していた。つまり、会う頻度が高い場所を居場所と感じるように推移していたので
ある。

次に、悩みがある中で居場所がどのような役割を果たしたのかを探る。就職活動がコロナ
発生と重なり、悩みが積もる中、居場所は機能していたのだろうか。結論としては、ほとん
どの人にとって機能していた。家族や距離の近い友人に相談したり出かけたりすることで、
心の落ち着きやリフレッシュに繋がっていた。もしその居場所がなかったら不安や焦りに
よってマイナス思考になっていたかもしれないという人が多数だったことから、悩んだ時
にも居場所が役立つことが考察される。

また、コロナが発生してからは zoom などオンラインで人と話すことが多く、物理的居場
所は閉ざされてしまった。そしてコロナ新規感染者も減少の兆しを見せていない 2020 年 12
月現在、これからもオンライン授業やオンライン会議などが続いていくと思われるが、オン
ラインは居場所となり得るのだろうか。インタビューの回答を見る限り、それは難しそうで
ある。なぜなら、オンラインでの会話は、タイミングが難しかったり、ボディランゲージも
なく場の雰囲気分からないため、実際の対面での会話とは異なるという否定的な意見が
全員から表明された。実際、対面で会えなくなったことによって疎遠になった友人も多くい
たり、ほぼ全てがオンライン授業になっている大学一年生は特に孤独感を感じる人も多い
という記事もある（西日本新聞 2020）。そのため、オンラインでの居場所づくりは厳しいも
のがあると考えられる。しかし地方や海外など離れた人とはオンラインが便利という利点
もある。そのため、コロナが収まってからもオンラインと対面の二つの選択肢が存在すると
より良いのではないだろうか。

4-4. 慶應義塾大学生にとっての居場所

慶應の学生全員ではなく 6 人へのインタビューのため、一般化はできないが、以上のこ
とを踏まえると、金銭的・将来的に恵まれた環境にいると思われがちな慶應義塾大学の学生
にとって、サークルやゼミ、バイトなどリアルでの友人との関わりが居場所になることが多
いことが分かった。また、悩んだ時にはそこでの友人に相談をすることで乗り越えることも
示された。つまり、今までの人生の中でも、悩んだ時は同じように気の許せる友人に相談を

することで頑張れた結果、現在の生活に繋がっているのだろう。次に、居場所となる場所の成立には、その時の自分との所属や趣味など何かしらの共通点があったり、何度も対面で顔を合わせる機会があることが多いことが明らかになった。そして、そこで嫌なことがあったときは、一旦他のコミュニティに行く人が多かった。そのため、複数の居場所を持っていることを前提として、距離を置いたり近づいたりしているのである。また、コロナによって生活が変化していくときには居場所の変化も見られた。それまで重点を置いていた居場所に行く頻度が少なくなったことで別の新たな場への参加が見られたのである。主に、大学の友人という、物理的な距離が遠くて対面で会えなくなった人とは心理的にも距離ができた一方で、バイトや中学の頃の友人など物理的に近い距離にいて、直接会える人との親密度が上がったのである。つまり、サークル活動や授業など自然に集まれる空間がないと会うこともなくなってしまっていたのだ。ここから、環境の変化によって柔軟に、自然に居場所を変えていること、また、オンラインの関係では居場所が薄れていくことが明らかになった。

4-5. 居場所の再定義

私は第2章で「居場所」という言葉を、自分が安心できる場所でもあり、かつ、自分らしくいられる場でもあると定義した。本論文での考察を経ても、その定義は維持できる。先行研究でもインタビュー調査でもこの言葉がでてきたことに加え、安心して自分らしくいられないと自発的にその居場所へ行きたいとは思わないからである。しかしそれに加えてして、人と一緒にいることによる精神的落ち着きをもたらしてくれるものであり、何かを共有できる場であるというのを追加したいと思う。なぜなら、悩んだときに居場所に行きたいと思い、それがなかったら不安がもたらされそうという意見が多かったからである。また、誰しも何かしらの共通点、興味をもって後に居場所になる場へ向かうので、共有できるものがあることも大事なのである。

そして、先行研究において居場所の概念は物理的な面より、自己完結する個人的場、他者との関係性の社会的場としての心理的な面の方が意味付けが強いとされていた。しかし、zoomと対面での対話の違いからも分かるように、物理的・空間的側面があつてこそその居場所という側面も大きいのである。初めからオンラインで対話をしているところはもちろんのこと、元から居場所だった場であっても対面である機会が減り、オンラインになると違和感が生じ、次第に疎遠になる傾向がある。つまり、同じ場、空気を共有してこそその居場所なのである。そのため、心理的側面の居場所が大事なことは言うまでもなく、その心理的居場所が成立するためには物理的側面が必要になってくるのである。

従って、「居場所」とは、自分に安心や落ち着きをもたらす、自分らしくいられると共に何かを共有できる場なのである。そしてそれには物理的側面と心理的側面の二つが揃ってこそ居場所足り得るのである。

5. 終わりに

インタビューの目的として、居場所がない人がこれから居場所と思える場を作るためにどうしたら良いのか、少しでもその助力となることを本論文の目的として掲げていた。インタビューを行った慶應義塾大学の若者にとって居場所は全ての人に存在し、そこに助けられている部分が多くあった。居場所があることによって内省できたり人との繋がりを感じたり、悩みを解決できたりしているのである。そのような居場所があることは必要不可欠である。現在、2020年11月23日時点で新型コロナウイルスによる全国の死者総数が2000人へ迫ろうとしている中、警察庁の統計によれば、10月だけで全国の自殺者数は2100人を超えている。この10月の自殺者数は例年より約600人も多くなっているようだ(ハーバービジネスオンライン 2020)。コロナによって人との繋がりが断たれ、仕事や家庭でのストレスやDVなどが増えた結果、自殺者数増加に繋がっているのだろう。このようなwithコロナの生活はしばらく続いていくと思われる。その中でも一人ひとりに居場所だと思えるようなところがあれば、暗く感じる生活の中にも光が見えるのではないだろうか。先行研究とインタビューの結果から、現代の若者にとって居場所は落ち着きを与えてくれたり、相談し、支え合う場として存在していることが分かった。そのような居場所を作るには、何度も対面で顔を合わせる機会を作り、そこと自分との共通点を探すことが大切になってくる。コロナ禍では対面で顔を合わせるのが難しいかもしれない。また、もしかしたら居場所だと思っていたところがある日突然自分のせい、あるいは周りの環境によって変化させられてしまうかもしれない。しかしその中でも変化に柔軟になり、誰かと話す機会を大事にし、承認し合い、繋がっていくことが居場所づくりの第一歩となると考える。そうすることで、居場所がないと感じている人も、居場所と思える場が一つから二つ、三つへと増えていくだろう。このように、一つの場に依存せずに複数の居場所を作ることで、困難な状況が起きても、乗り越えていくことができるだろう。居場所とは、そのような役割を担っているものなのである。

6. 参考文献

- 阿部彩, 2012, 『弱者の居場所がない社会』講談社現代新書.
阿部真大, 2011, 『居場所の社会学——生きづらさを超えて』日本経済新聞出版社.
上野千鶴子, 2018, 『情報生産者になる』ちくま新書.
久田邦明編著, 2000, 『子どもと若者の居場所』萌文社.
中藤信哉, 2017, 『心理臨床と「居場所」』創元社.
日本建築学会編, 2010, 『まちの居場所』東洋書店.

レイ・オルデンバーグ, 忠平美幸訳, マイク・モラスキー解説, 2016, 『サードプレイス コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』 みすず書房.

ちょび, 2012, 『居場所の定義として挙げられているもの』 最終検索日 2020/8/2 (<https://cb0318.hatenadiary.org/entry/20120811/1344706366>).

内閣府, 2017, 『子供・若者の意識に関する調査(平成 28 年度版)』 最終検索日 2020/8/2 (https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/s0_0.html).

石本、雄真, 2009, 『居場所概念の普及およびその研究と課題』 最終検索日 2020/8/24 (http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81001689).

文部科学省, 『学校不適応対策調査研究協力者会議報告』 平成 4 年最終検索日 2020/8/24 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/06042105/001/001.htm).

藤原靖浩, 2010, 『居場所の定義についての研究』 (https://kwansei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=22290&file_id=22&file_no=1).

浅木海音、奥野誠一, 2018, 『大学生の心理的居場所感とソーシャルスキルとの関連』 最終検索日 2020/8/2 (https://rissho.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=5757&file_id=20&file_no=1).

日本学生支援機構 『学生相談について』 最終検索日 2020/8/2 (https://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/fieldfile/2015/10/09/soudan.pdf).

高井 範子, 2008, 『青年期における人間関係の悩みに関する検討』 (https://doi.org/10.20689/taiseikiyou.10.0_85).

忽那賢志, 2020, 『新型コロナはいつから世界に広がっていたのか』 最終検索日 2020/09/26 (<https://news.yahoo.co.jp/byline/kutsunasatoshi/20200627-00184576/>).

NHK, 2020, 『特設サイト 新型コロナウイルス』 最終検索日 2020/12/30 (<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/emergency/>).

NHK, 2020, 『大学生と作る就活応援ニュースゼミ』 最終検索日 2020/09/26 (https://www3.nhk.or.jp/news/special/news_seminar/syukatsu/syukatsu512/).

SankeiBiz, 2020, 『コロナで一変 就活長期化 内定状況 1 カ月遅れ メンタルケアも』 最終検索日 2020/09/26 (<https://www.sankeibiz.jp/workstyle/news/200716/ecd2007160500002-n1.htm>).

『西日本新聞 コロナ禍の大学生、悩み深刻 九大 4 割が孤独感、APU 6 割「困っている」』 最終検索日 2020/12/28 (<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/646376/?page=2>).

ハーバービジネスオンライン, 2020, 『yahoo japan ニュース コロナの死者よりも多い自殺者

数に海外メディアが驚愕。日本の「メンタルヘルス・パンデミック」』最終検索日 2020/12/30

(<https://news.yahoo.co.jp/articles/468823530bb795058b5d12e78a29eb6889f409c1>).

『警察庁調査 令和2年の月別の自殺者数について』

(<https://www.npa.go.jp/safetylife/seianki/jisatsu/R02/202011sokuhouti.pdf>).